

いる図なのに、日本のはいずれも曲針になっており、しかも両端針になっている。また時代が後へ進むほど糸の姿が見えなくなっていく。この間の経過をたどってみると、オランダの木版にまぎらわしいものがあり、その変形が強調された新しい木版を使用した版が、たまたま日本に到来した最初の本であったために、わが国の針が原著とちがって曲ってしまったものと解った。その本とはウィレム・ホフマン (Willem Hoffman) が楢林鎮山 (1638~1711) に渡した一六四九年版の、パレ全集オランダ版である。この年アムステルダムではシッペル (Schipper) 版とウィレムス (Willems) 版二種が出版されているが、前者が針を曲げしかも二本にしているのである。この本が日本の針の図を曲げさせてしまった罪を作りながら、それ故に自分が最初に日本に到達したのであることの証拠も残したのである。震災で焼失したとされているホフマン由来の幻の本と同じ版の一六四九年のシッペル版をこの春大阪の適塾で見かけたことから、曲った針の謎を解くことが出来たのであった。

小石元俊の「経験方録」について

津 田 進 三

小石元俊は関西にはじめて蘭学を主唱した人として著名であるが、自らはオランダ語を解しなかったので、その医学は蘭方というよりは漢蘭折衷のものであったといわれている。

一方また、元俊は親試実験の学風を体現した人物であって、良方と聞けば有名無名、親疎、あるいは遠隔を問わずにその伝方を

求めて、治方を考究したことでも知られている。

「石川県立郷土資料館(大鑑彦太郎文庫)所蔵の「経験方録」は、小石元俊が各地から良方を得て編輯した処方集であるが、その採集の人数、地域ともに広範囲にわたっている。元俊の医術を知る上で貴重な資料であろうと思われる。

一、本書所収の処方数は二八六方である。

一、伝方者は家方名が明記されたものは一〇七人、二〇一方であるが、このうち同一人からの伝方が多いものは、熊谷文台の九方、小野蘭山、河埜意仙、高陽朴の各八方、沢周倫の七方、熊谷文泰、芝林蔵の各六方、石川支常の五方、などであって、杉田玄白からは三方が伝えられている。

一、「先生方」とあるのは、淡輪元潜、山脇東洋、小野蘭山、今枝榮濟の四人である。

一、曾昌啓から伝方の三方には、いずれも「西洋方」と記されている。

一、ミキステコール方などカタカナの名の処方もの六方が含まれている。

一、岩永家の「靈丹方」は、水銀を使用した駆梅劑であるが、その製法も記されている。

一、本書の成立年代も、写本者もまだ不明であるが、文中に「元按……此人、伝此方於小先生」との記載がある。